

9 夏まき短根ニンジンの栽植距離

1 背景と特徴

夏まき短根ニンジンは労働力配分、他の野菜との組み合わせによる土地の有効利用及び輪作体系の面で有利であることから最近栽培されるようになったが、春まきと比較して価格が不安定なこともあり、栽培面積はまだ少ない。したがってこの作型を安定させるためには春まき以上に品質が良く、多収であることが必要である。品種と播種適期についてはすでに明らかにされたので栽植距離について検討した。

2 技術内容

夏まき短根ニンジンの栽植距離は畦巾 60 cm、株間 10 cm、2条まき (33,333株/10 a) 及び畦巾 70 cm、株間 8 cm、2条まき (35,714株/10 a) が適当である。なお条間は 20 cmとする。

3 普及上の留意点

- (1) 密植となるため、間引時の生育不良株はクズ根になるため間引には注意を要する。
- (2) 畦巾 60 cm、株間 10 cm、2条まきは土寄せしにくいので収入型品種を使用する。特に越冬させる場合は培土をていねいに行う。
- (3) 畦巾 70 cm、株間 8 cm、2条まきは土寄せは容易であり越冬させる場合都合が良いが、間引に手間がかかる。
- (4) 播種期が遅れた場合や地力が低い畑の場合は1条まきし、根の肥大を促進させる。

4 試験成績の概要

(1) 試験課題名

夏まき短根ニンジンに関する試験

(2) 試験年次及び場所

昭和52年 岩手県園芸試験場高冷地分場

(3) 試験方法

栽植距離試験

畦 巾	株 間	条 数	10 a 当たり株数
50 cm	10 cm	1 条	20,000 株
60	10	2	33,333
70	8	2	35,714
60	8	2	41,667

播種期 6月24日

供試品種 キング冬越五寸

(4) 試験結果

根重は50-10-1区(畦巾50cm、株間10cm、1条まきを示す)が最も大きく、密植するほど根の肥大が劣り、クズ根率も多い傾向を示したが収量は密植するほど増加し、2条まきの全区が4,500Kg以上の収量を示した。中心規格であるM、L級の占める割合は50-10-1区、60-10-2区及び70-8-2区が57~58%を示したが60-8-2区が少なく約50%であった。規格別収量はLL級を除き他のすべての等級において2条まき区が1条まき区より収量が高く、中心規格のM、L級は60-10-2区及び70-8-2区が多く、2,600Kgをこえる収量となった。これらのことを総合すると畦巾60cm、株間10cm、2条まき及び畦巾70cm、株間8cm、2条まきが栽植距離として適当であると考えられた。

(5) 主要成果

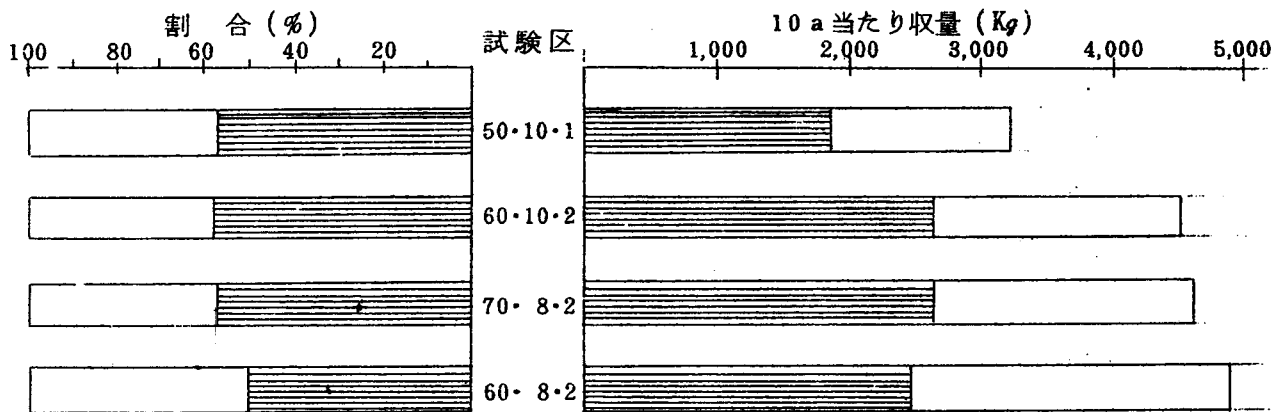
第1表 収量調査(播種後130日)

試験区 畦巾・株間・条	根重 (g)	根重比 対60 ・10・2	根長 (cm)	根径 (cm)	障害根				クズ 根率 (%)	障害 根+ クズ根 率(%)	10a 当たり 収量 (Kg)	収量 比
					抽台 率(%)	裂根 率(%)	岐根 率(%)	腐敗 率(%)				
50・10・1	188	118	17.1	5.3	0.2	9.1	2.8	0	1.6	13.7	3,244	72
60・10・2	160	100	16.0	4.9	0.2	3.0	1.7	0.3	10.7	15.9	4,518	100
70・8・2	151	94	15.2	4.8	0.1	3.4	1.6	0	9.1	14.2	4,628	102
60・8・2	150	94	14.9	4.8	0	3.0	4.0	0	14.5	21.5	4,919	109

第2表 規格別割合及び規格別収量

試験区 畦巾・株間・条	規格別割合(重量%)					10a当たり規格別収量(Kg)					
	LL 260g 以上	L 200~ 260g	M 130~ 200g	S 80~ 130g	SS 50~ 80g	LL	L	M	S	SS	計
50・10・1	28.2	28.0	29.4	12.8	1.6	914	909	956	415	50	3,240
60・10・2	21.4	22.3	35.8	16.9	3.6	965	1,008	1,618	763	164	4,518
70・8・2	14.5	21.5	35.7	23.2	5.1	672	996	1,652	1,075	233	4,628
60・8・2	18.4	18.8	31.4	25.5	5.9	907	924	1,543	1,255	290	4,919

第1図 中心規格(M、L級)の割合と収量



はMとL級の合計を示す。

5 残された問題点

特になし

6 参考資料

- (1) 岩手県園芸試験場高冷地分場試験成績書 昭和52年
- (2) 北海道中央農業試験場野菜試験成績書 昭和50、51年

10 高冷地における短根ニンジン、スイートコーン、ハクサイ、ダイコンの晩播限界

1 背景と特徴

本県は昭和51年の晩霜害とその後の異常低温による冷害を含めて近年気象災害が頻発しているが、このような異常気象に対処する技術対策の基礎資料は野菜に関して極めて少ない。このため気象災害の対策資料を得ることは緊急課題であり、本試験では短根ニンジン、スイートコーン、ハクサイ、ダイコンの4作目について晩播による減収程度を検討し、晩播限界について把握したので参考に供したい。

2 技術の内容

(1) 短根ニンジン

春播品種の露地栽培では6月中旬播が標準播種より22%の減収となるが実用的な播種範囲にあり、6月中旬までの播種が可能である。また6月中旬までは春播品種で対応出来るが6月中～下旬の播種は夏播品種の適用が必要となる。

(2) スイートコーン

ハニーバンタム極早生は7月上旬播が42%の減収となり、また6月下旬播は4%の減収ではあるが規格別収量からみて実用性が低く、マルチ直播栽培を前提とした晩播限界は6月